紹介記事

小学校の廃校舎を活用した地域の活性化
～観光学部地域インターンシップの取り組み事例～

和歌山大学観光学部
特任助手　上野山　裕士

1．域学連携と観光学部の取り組み

地域と大学の連携は、現在、社会的な注目が高まるテーマのひとつとなっている。具体的に、総務省が大学生及び教員が住民等とともに地域づくりに継続的に取り組む「『域学連携』地域づくり活動」を支援していることや、文部科学省が地域の課題と大学の資源の効果的なマッチングにより地域の課題解決に取り組む「地（知）の拠点整備事業」及び大学が自治体、企業等と協働して地域が求める人材を養成し、地方への人材の集積を目指す「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+)」を展開していることは、その好例である。多くの大学にとって地域との連携は、学生が地域で学び、その成果を地域に還元することの意義（磯田 2013)、大学が有するさまざまな資源を活用する場としての地域への着目(上野 2009)、そして、大学が地域と創造的な関係を結ぶことの重要性(小林、他 2008)などの視点から、重要なミッションとして捉えられている。また、これらの取り組みには多くの地方自治体も賛同、参画しており、地域、大学の双方が連携の必要性を認識していると言える。

大学生をはじめとする若者、地域外の人びとが地域に関わることの意義については、学術的な視点からも指摘されている。たとえば、都市農村交流には「地元の人びとが地域の価値を、都市住民の目を通じて見つめ直す効果」があるとする見方（小田切 2013）や、伝統や文化に根差した地域の発展を目指す内発的発展論が地域外との関わりを強調している点（鶴見 1999)、さらに近年、社会学の領域で注目されるソーシャル・キャピタル論（社会関係資本）において、とくに日本においては、外部に開かれたつながりの構築が枢要とされている点（猪口 2013）などは、その顕著な例である。

和歌山大学観光学部において、2008 年度から実施されている地域インターンシッププログラム（LIP:Local Internship Program）は、このような地域と大学との連携を推し進める取り組みのひとつである。LIP とは、学生が現地に足を運び、地域の人びとと連携することによって地域の課題解決を目指すもので、2015 年度までに、合計 62 のプログラムが実施され、延べ 611 名の学生（実人数ベースで 545 名）が活動に参加した。LIP に参加する学生は、学内の事前学習や現地視察を通して地域の実情を学び、さらには現地調査や地域住民との交流、イベントの企画運営などを通じて、それぞれの地域の真の魅力や課題と向き合っていく。具体的な活動内容は、観光施設の視察や就業体験、施設の職員や利用者への聞き取り調査、宿泊施設や農家民泊のモニター、集客イベントの企画運営、観光資源調査やマップ作成など多岐にわたる。

本稿で取り上げる小学校の廃校舎を利用した地域活性化に向けた活動も、LIP のひとつとして和歌山県海草郡紀美野町から提案を受けたもので、2014 年より、地域住民と学生による協働的実践が展開されている。

2. 紀美野町上神野地区における実践

和歌山県海草郡紀美野町は、県北部に位置する自治体で、2006 年、いわゆる平成の大合併により、旧野上町と旧美里町が合併して誕生した自治体である。旧町のうち、旧野上町は、海南市に隣接しているほか、国道沿いを中心に商店、医療機関などの社会資源を保有しているが、旧美里町は、一部が国道に面しているほかは住宅が山間部に点在しており、少子高齢化の進展に伴う担い手不足から、商店等も減少傾向にあり、多くの住民は自動車を手放せない生活を送っている。以上のような特徴を有する紀美野町のなかで、学生たちは、旧美里町域に位置する上神野地区を中心に地域住民との協働的実践を展開している。

上神野地区は、図表 1 に示す通り、高齢化率が町平均より高い程度であるが、地区内 9 つの小地域のうち 5 地域では、高齢化率が 50%を超えており（2014 年 9 月末現在）、高齢化に伴う移動や担い手不足の問題は、町内の他地域と同様、深刻なものとなっている。

図表 1　A 地区の概況

項　　目	上神野地区	町全体の状況
人　　口	597 人	9,896 人
高齢者人口（率）	259 人（43.4%）	4,055 人（41.0%）
前期高齢者人口（率）	95 人（15.9%）	1,689 人（17.2%）
後期高齢者人口（率）	164 人（27.5%）	2,357 人（23.8%）

※数値は 2014 年 9 月末現在

（出所：「第 3 次きみのいきいき行動計画」）

上神野地区における学生の活動は、地域からの提案（LIP への応募）により、2014 年度、開始された。この活動が求められる背景としては、「一部の地区行事では継続を断念しているものもあり、地域活動の担い手の減少、誇りの空洞化によって地区の財産である自然・観光資源の掘り起しが十分にできていない、地区活性化にむけた取組を継続していくための体制構築が課題となっている」」ことが挙げられている（2015 年度活動提案書[3]より抜粋）。また、地域活性化に向けた具体的な取り組みとして、廃校となった上神野小学校の地域拠点化が掲げられており、学生たちも、上記の目的を踏まえた活動を行うこととなった。以下、学生たちの地域における活動を、年度ごとに示す。

（1）2014 年度の活動

活動初年度である 2014 年度の取り組みには、一回生 6 名が参加した。学生たちの活動

[3] 紀美野町上神野地区における LIP は 2014 年度より実施されているが、ここで示す「活動が求められる背景」は、2015 年度の LIP 活動提案書様式改変に伴い追加された項目のため、ここでは当該年度の提案書記載内容を抜粋する。

は、地域を知ることからはじまった。具体的には、活動拠点である上神野地区のみならず、町内の観光資源となるスポット（みさと天文台、生石高原、たまゆらの里、地域へのＩターン・Ｕターン者が経営する飲食店など）を巡り、五感を使って地域の魅力と触れ合った。さらに、地域住民との交流を通じ、その思いや地域の将来ビジョンについて、イメージを共有することを目指した。

上記を踏まえた具体的な取り組みとして、学生たちは、紀美野町の PR 動画の企画・作成、小学校校庭での石窯づくりを地域住民、関係者とともに行った。前者は、「紀美野町での一日」をテーマに、先に述べた観光資源巡りを通じて学生たちがとくに魅力を感じたスポットを紹介するというストーリー仕立ての動画で、町全体の魅力を広く発信するものとなっている[4]（図表 2）。また後者は、小学校に多くの人びとが集い、交流するための仕掛けのひとつとして提案されたもので、地域住民が主体となり、石窯を基礎から作り上げた。学生たちも、足繁く地域に通い、作業の手伝いを行った（図表 3）。

以上のように、一年目は、地域住民をはじめとする地域関係者（行政職員、地域に縁のある人びと、など）が主体となる取り組みに学生が参画し、そのサポートを行うことが中心的な活動であった。

図表 2　PR 動画撮影中の 1 コマ（出所：筆者撮影）

図表 3　石窯の基礎工事を行う学生たち（出所：筆者撮影）

[4] 当該動画は、動画共有サービス YouTube において閲覧することができる（https://www.youtube.com/kamigaminosato　最終閲覧 2016.6.27）。

（2）2015 年度の活動

活動二年目の取り組みには、26 名（一回生 17 名、二回生 9 名）という多くの学生が参加した。2015 年度の活動は、小学校地域拠点化作業、特産物を用いた商品開発、まちづくり推進会議への参加に大別される。以下に概要を示す。

まず、小学校地域拠点化作業とは、初年度からの継続作業として、小学校を地域の交流拠点として整備するための様々な作業、イベントを、地域関係者と協働して行うものである。とくに、夏祭り（8 月）や芋煮会（1 月）には、地域内外から多くの人びとが訪れ、楽しく、懐かしい小学校でのひとときを過ごしている様子がみられた。次に、特産物を用いた商品開発について、地域の特産物のひとつである柿を用いた柿チップの商品化を摘果から行うとともに、同じく地域の特産物である金時生姜と山椒を用いたあんかけうどんを調理し、和歌山大学祭及び柿の市（紀美野町農林商工まつり）において販売した。これらの機会は、地域の特産物や学生の活動への認知度向上につながった。そして、まちづくり推進会議への参加については、2015 年 8 月から実施されている同会議に学生たちが出席し、住民たちと活動の方向性や地域の将来について議論するなど、学生が地域により積極的に関わる契機となった。なお、上記の取り組みについては、2016 年 1 月に紀美野町文化センターで開催された地域活性化シンポジウムにおいて、学生たちが活動報告を行う機会が設けられた。

以上のように、二年目は、参加学生も大幅に増えたことで活動の内容が多様なものになるとともに、学生が主体的に地域に関わる場面も多くみられるようになった。

本節では、既に活動が終了した 2014、2015 年度の取り組みについて取り上げたが、地域における活動は、2016 年度も継続実施されている。活動 3 年目となる今年度は、28 名（1 回生 6 名、2 回生 14 名、3 回生 8 名）の学生が、地域でのイベントの企画・運営に携わるイベント班、小学校のコミュニティ・カフェ化作業に携わるカフェ班、そして地域の観光資源や文化、伝承の掘り起こしを行うまちあるき班の三班に分かれ、地域の活性化を目指した取り組みを行っている。

図表 4　上神野小学校校庭で実施された夏祭りの様子（出所：筆者撮影）

図表 5　柿チップの袋詰め作業を行う学生たち（出所：筆者撮影）

3．活動の意義と今後の展望

本論のまとめとして、上神野地区における活動の意義について、(1) 協働の重要性、(2) 協働の発展性、(3) 長期的な視点の必要性、の三点から検討する。

まず、上神野地区における活動には、地域住民をはじめ、行政職員（地域おこし協力隊員、集落支援員を含む）や、地域に縁のある人びと、そして大学生など、多様な主体が参画していた。同地区の住民の中には、古くから地域に住まう人びともいれば、近年、地域に移住してきた人びとがいることも特徴的である。地域活性化に向けた取り組みに多様な主体が関わることは、活動を展開する上でのマンパワーを確保につながるとともに、新たな視点、気付きをもたらす可能性がある。同地区の取り組みにおいては、学生も、幾ばくか、ではあるが、そのような役割を担っていた。

次に、協働の発展性について、既に述べたように、学生たちの活動は徐々に広がりを見せている。これは、地域と学生との関係が協働的実践の展開過程で変容したことに起因すると考えられる（参加学生数の増加も大きな要因のひとつであろうが）。具体的には、学生が地域を知り、地域のマンパワーとなることからスタートし、地域住民との信頼関係を醸成し、小さな成果を積み上げることにより、活動や協働の質の変容が徐々にもたらされた。これは、地域と学生に限らず、様々な主体間の関わりにも当てはまると考えられ、地域における協働の発展可能性を示唆するものと言える。

最後に、長期的な視点の必要性について、既に述べた二点が、地域と大学との継続的な関与によってもたらされたことからも明らかである。ただしその際、地域活性化という目的について、その具体的な手法（本事例で言えば、小学校の地域拠点化）を含めて共有すること、そして先に述べたような、小さな成果の積み上げにより信頼関係の醸成することは、両者の適切な関係維持にとっても不可欠な視点となる。

地域における取り組みは、あくまで、地域住民の意思決定と主体性により成立するものである。しかし、地域と大学とが信頼関係に基づき協働的実践を展開していくことが、地域やそこに住まう人びとの暮らしを豊かなものにする一助となれば、地域再生のよきパートナーとしての大学の存在意義が高められることもまた確かであろう。

引用・参考文献一覧

猪口孝（2013）「日本－社会関係資本の基盤拡充」（ロバート・D・パットナム編著『流動化する民主主義』ミネルヴァ書房）308-340 頁
磯田文雄（2013）「地域社会と大学」（北海道教育大学旭川校地域連携フォーラム実行委員会編『地域連携と学生の学び－北海道教育大学旭川校の取り組み』協同出版）3-8 頁
紀美野町（2015）『第 3 次きみのいきいき行動計画』
小林英嗣、他編著（2008）『地域と大学の共創まちづくり』、学芸出版社
小田切徳美（2013）「農山村再生の戦略と政策　総括と展望」（小田切徳美編『農山村再生に挑む　理論から実践まで』岩波書店）225-250 頁
鶴見和子（1999）『コレクション鶴見和子曼荼羅Ⅸ　環の巻』藤原書店
上野武（2009）『大学発地域再生』アサヒビール株式会社
和歌山大学観光学部（2015）『2014　地域インターンシッププログラム活動報告書』
和歌山大学観光学部（2016）『2015　地域インターンシッププログラム活動報告書』